

近代中国におけるセクシュアリティ言説 —雑誌『生活』の投書欄における論争を中心に—

楊 韜

0. はじめに

1920、1930年代の中国において、恋愛結婚・女性解放・貞操及び性道德などは、若者の「悩み」としてだけでなく、中国近代化にもつながる重要な問題として、マス・メディアによって大いに語られていた。このようなセクシュアリティをめぐる言説は、一体どのようなものであったか。当時の若者にとって、性関係に関してどのような悩みがあったのか。マス・メディアはどのようにこの問題を取り上げたのか。そして、語られたセクシュアリティ言説は近代中国の人々に、どのような影響を及ぼしたのか。本論では、1933年の雑誌『生活』の投書欄で繰り広げられた「恋愛と貞操」をめぐる論争を具体的な事例として取り上げ、セクシュアリティをめぐる言説を考察する。

近代中国におけるセクシュアリティをめぐる言説、とりわけ「恋愛」や「貞操」などに関する研究はこれまで盛んに行われてきた。主な先行研究としては、小野（1978）、中山（1983）、張（1993）、清水（1995）、白水（1995）、彭（1995）、坂元（2004）、村田（2005）、陳（2006）などが挙げられる。これらの研究では、様々な角度から近代中国におけるセクシュアリティやジェンダーの事象に焦点が当てられている。筆者は、これまであまり注目されてこなかった「投書欄言説」という視点から検証を試みたい。1933年に『生活』誌上で展開された「恋愛と貞操」論争によって、『生活』第8巻の「恋愛」に関する投書は52本にのぼった。また、1926年の第2巻から1933年の第8巻にかけての『生活』投書欄全体でも、「恋愛」や「婚姻」に関する投書数は多かった（表1参照）。したがって、セクシュアリティに関する投書は、投書欄の主役の一人であり、当時の人々の関心を知るための重要なトピックである。

本論の構成としては、まず1910年代、1920年代における知識人によるセクシュアリティをめぐる言説を概説し、その歴史と特徴を考察する。次に、1930年代における雑誌『生活』投書欄の「恋愛と貞操」をめぐる論争に注目する。論争の具体的内容を分析したうえで、さらに1910年代と1920年代に起きた二つの論争と1930年代の論争との比較から見える特徴や、『生活』編集者である鄒韜奮¹がこの論争で果たした役割などについて若干の考察を試みたい。

表1 『生活』における掲載投書トピックと本数（巻別）

	学業	職業	家庭	社会	恋愛	婚姻	国家	その他	合計
第1巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2巻	5	5	4	15	1	0	0	19	49
第3巻	2	3	6	5	6	23	2	9	56
第4巻	9	5	11	8	16	31	9	27	116
第5巻	12	7	8	10	12	7	9	27	92
第6巻	9	2	4	15	13	13	46	18	120
第7巻	3	0	4	7	5	5	30	13	67
第8巻	3	1	0	10	52	1	16	15	98
合計	43	23	37	70	105	80	112	128	598

出所：『生活』影印本に基づき、筆者作成

1. 近代中国におけるセクシュアリティ言説の歴史と特徴

1910年代以降の中国において、恋愛と貞操及び性道德などをめぐる論争はたびたびメディアに登場した。ここでは、まずいくつかの代表的な論争を時系列で確認しておく。

まず、1918年雑誌『新青年』²における「貞操」をめぐる論争を見てみよう。1918年5月、周作人³が与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」を「貞操論」と題して翻訳した。これを契機として、貞操論争が『新青年』誌上で展開され、胡適⁴、魯迅⁵、藍志先⁶らが次々に議論に参加した。そこでの主要な論点は、女性だけに貞操が要求される古い貞操観念は、男女不平等の思想であるため否定すべきであるというものである。また、貞操は愛情のある男女の間で同等に求められるべきとし、自由恋愛に基づく結婚制度や一夫一妻制が主張された。この時の論争の発生は、当時の中国における「イプセン主義」という大きな流れとも関係している。1918年6月、胡適と羅家倫によってイプセン劇『人形の家』が翻訳され、『新青年』にて自立した人間として古い家を出た女性像が紹介された。1918年の論争に関わった各発言者とその記事を以下の表2で示す。

表2 1918年『新青年』における「貞操論争」

発言者	掲載日、掲載号	タイトル
周作人	1918年5月、第4巻第5期	貞操論
胡適	1918年7月、第5巻第1期	貞操問題
魯迅	1918年8月、第5巻第2期	我之節烈觀
周作人	1919年4月、第6巻第4期	討論
胡適	同上	討論
藍志先	同上	討論

出所：『新青年』に基づき、筆者作成

次に、1925年雑誌『婦女雑誌』⁷や『現代評論』⁸における「新性道德」をめぐる論争についてみる。1925年1月、『婦女雑誌』の編集者である章錫琛⁹によって「新性道德特集号」が組まれた。この特集号のなかで新たな性道德を提唱した章錫琛と周建人¹⁰の主張を、陳百年¹¹が批判し、その後三人による論争が続いた。章錫琛と周建人は、性的関係において男女は平等であり、性的関係自体は私的なものだが、生殖は公的なものであると主張した。また、章と周は、自分と他人を害さない恋愛や性関係は不道德ではないと論じた。陳百年の批判は、とくにこの点に集中している。陳は、複数を対象とする恋愛に反対し、一夫多妻が性欲のおもむくままに行動した結果だとして、性欲の節制を説き、厳格な一夫一妻制の小家族がもっとも理想的であると主張した。これに対して、章と周は、「性の自由・性の解放」と「従欲・放縦」とは違うと反論した。これらの論争を以下の表3で示す。

表3 1925年「新性道德論争」発表記事

発言者	掲載日、掲載号	タイトル
章錫琛	1925年1月、『婦女雑誌』第11巻第1期	新性道德とは何か
周建人	同上	性道德の科学的基準
陳百年	1925年3月、『現代評論』第1巻第14期	一夫多妻の新しい保護符
章錫琛	1925年5月、『現代評論』第1巻第22期	新性道德と多妻
周建人	同上	恋愛自由と一夫多妻
陳百年	同上	章周二先生の「一夫多妻論」への回答
章錫琛	『莽原』第4期	陳百年教授の「一夫多妻の新しい保護符」への反論
周建人	同上	「一夫多妻の新しい保護符」への回答

出所：『婦女雑誌』、『現代評論』、『莽原』に基づき、筆者作成

以上の二つの論争の参加者は、いずれも周作人、魯迅、章錫琛、周建人などの著名知識人が中心であるため、このような一部の著名知識人による論争がどれほど一般の人々の意見を代表しているのか、という疑問が残る。この疑問を少しでも解消する方策の一つとして、一般読者の投稿が多い雑誌『生活』の投書欄の記事を検証することが考えられる。一般人という立場での発言が多く寄せられているからである。次に、『生活』の投書欄における論争へ移る。

2. 雑誌『生活』の投書欄における「恋愛と貞操」をめぐる論争

(1) 雑誌『生活』及びその投書欄について

本論で用いた雑誌『生活』及びその投書欄の具体的状況については、拙稿(2009a、2009b)を参照されたい。ここでは、簡単な概説に止めておきたい。1920年代以降、中国の出版業界は繁栄期に入り、上海が全国出版業の中心地となった。多くの新聞や雑誌が発行されるなか、『生活』を中心とする生活書店¹²の出版物は特別な存在となった。当時、ほとんどの雑誌の発行部数は2000部以下であり、一万部を超えるものは少なかった(許 1999 178)。しかし、生活書店の雑誌『生活』の発行部数は1928年に4000部に達し、翌年の1929年には驚異の八万部まで増加した。さらに1931年の満州事変以降12万部まで増え、1933年12月に国民政府当局に発行禁止された時点では15.5万部の発行部数となり、民国時期において発行部数がかつても多い雑誌である(許 1999 188)。このように、生活書店の出版物には、発行部数から膨大な読者数が存在することが推測できる。この意味では、『生活』などの生活書店出版物が世論に与える影響力は非常に大きいと思われる。

同時期のほかのメディアに比べると、『生活』は誌面内容よりも、とくに投書欄を重視した編集で注目を集めた。投書欄の投稿者はまず、雑誌『生活』の読者であると想定される。投書欄への手紙は読者たちの意見や主張を含んでいる。各読者からの手紙は個々の視点から提起された多種多様な個人的問題であるかもしれないが、これら具体的な問題は同時期の社会において発生したために、それなりの共通性をもっている。それは、その時期の社会背景がもつ共通性から由来するものだけとも言えよう。また、生活書店の出版物の目玉とも言える「投書欄」は、広い読者層を討論の場を集めることができただけでなく、それによってこれまで主に知識人(学者)が中心メンバーとなっていた議論の参加者の層を大きく変えた。これは、本論で「投書欄」という視点から近代中国におけるセクシュアリティをめぐる言説を検証する理由でもある。

(2) 「恋愛と貞操」をめぐる論争

1933年4月15日の『生活』第8巻第15期に「恋愛と貞操」という署名克士の評論が掲載され、その後の9月2日の第8巻第35期までの4カ月間に渡って、この記事をめぐる論争が投書欄において展開された。掲載された関係投書は50本以上に及んだ。その主な争点は、以下の二つである。①恋愛の基本条件は「性的欲望」のみであるのか、それとも思想や感情などの「人格的接合」も必要なのか。②恋愛において、貞操という要素はどう捉えられるのか。

この論争の発端となった記事「恋愛と貞操」の作者は、克士＝周建人である。周建人はこれまでも恋愛や貞操及び性道德などをめぐって数多くの論評を発表してきた人物である。今回の論争も知識人の発言によって始まったが、その後の投書欄での参加者は一般読者が中心であった。また、『生活』の編集者である鄒韜奮による論争の誘導あるいはコントロールも見られる。これは、これまでの知識人に限られた論争と大きく異なると言えよう。以下、少し具体的に見ていきたい。

周建人は、1933年4月15日の『生活』に「恋愛と貞操」と題した評論記事を発表し、以下のように述べている。

「恋愛」とは何か。これに対する解釈は多く存在するが、非常に抽象的かつ複雑である。俗な言い方をすれば、異性を求めることは猫が魚を求めることに例えることができる。この例えは非常に的を得ている。性的要求は食欲に大変似ている。身体全体の細胞には食物による栄養が必要であり、なければ飢餓状態に陥る。性欲はこのような栄養は必要としないが、食欲亢進の際の消化腺の分泌作用と同様に、性欲も性腺の分泌によるものである。(中略) 性欲と食欲は、本質は類似しているが、満足の手段が異なる。(中略) 貞操については、いずれにせよその本質は女性に対する束縛であり、恋愛の本質によるものではない。(『生活』第8巻第15期、1933年4月15日)

この記事が掲載された誌面において、『生活』の編集者である鄒韜奮は、議論が予想されるとして、次のような「付記」を書いた。

克士先生のこの評論については、おそらく激しい反論が起こるだろう。皆さんのご意見は大歓迎で、この投書欄での議論を期待する。編集者個人の意見は、現時点では保留とする。まず皆さんと克士先生のご意見を聴きたい。(『生活』第8巻第15期、1933年4月15日)

そして、周建人の評論記事が発表された二週間後の4月29日の『生活』に、周萍子という読者からの投書が掲載された。そこでの反論は、恋愛と性欲の關係に集中した。具体的な内容は以下の通りである。

克士先生が主張する「性欲と食欲は、本質が類似しているが、満足の手段が異なる」という意見に賛同する。しかし、食欲の満足はお腹を満たすことであるが、性欲の満足は性そのものを満たすことではない。もっと露骨に言うと、つまり性交という行為で済むことではないということである。ほかにも克士先生が認めていない「思想・感情・趣味」などの人格的要素がある。（『生活』第8巻第17期、1933年4月29日）

この反論に対して、周建人は動物の例を挙げて生物学の視点から解釈した。さらに、宦官という中国封建社会にあった現象も言及し、以下のように述べている。

以前、「宦官」のような人間が存在した。宦官は思想と喜怒哀楽などの感情をもつ人間である。しかし、去勢された宦官は、睾丸がないため内分泌作用もなくなり、恋愛の熱情もない。（成年してから去勢された場合は例外）。宦官を愛する女性は稀で、半陰陽（間性）の女性を愛する男性も珍しいように、恋愛は性欲に基づくわけである。私は、恋愛における思想や感情に反対しているわけではない、ただそれらが恋愛の発生と持続の基本条件ではないと言っているだけである。（『生活』第8巻第17期、1933年4月29日）

周建人と周萍子の両者の意見分岐、すなわち、恋愛の基本条件は「性的欲望」のみであるのか、それとも思想や感情などの「人格的接合」も必要であるのかに関しては、この後、論争の中心争点となった。周萍子と同じ意見をもつ読者からの投書はほかにも多くみられた。その一部を挙げておこう。呉蠻人という読者から、次のような意見が寄せられた。

真の恋愛は、性欲に思想や感情などの人格的接合を加えて成立するものである。貞操については、個々の人々の判断に委ねるべきである。（『生活』第8巻第19期、1933年5月13日）

この意見に対して、周建人は「「人格的接合」とは何か。思想には階級制が含まれるが、恋愛には含まれない」（『生活』第8巻第19期、1933年5月13日）と疑問を投げかけた

が、彼が生物学の理論を根拠として提起した「人間—動物」の例えに対しても、多くの反論が寄せられた。いくつかの例を挙げてみよう。丁慶生という読者からは、次のような意見が寄せられた。

人間と動物は異なる生物である。動物と違って、人間には理性がある。克士氏の例えは妥当ではない。（『生活』第8巻第20期、1933年5月20日）

錫斌という読者からも、次のような意見が寄せられた。

恋愛については、性欲のほかに、性格・学識・年齢・思想などの条件もあり、「猫が魚を求む」というような単純なものではない。（『生活』第8巻第22期、1933年6月3日）

さらに、翼之という読者が「克士氏の観点は強引である。人間は単純な生物ではなく、社会に生きる生物である。人類社会や階級的生存関係をなしにして人間の行動を解釈することは不可能」（『生活』第8巻第30期、1933年7月29日）と述べるなど、周建人の生物学理論に基づく発想を根本的に否定するような発言もあった。

そして、論争の後半になると、周建人に対し、彼の考えが生物学の理論に偏り、唯物論的であるという意見も現れた。心病という名前の読者から、次のような意見が寄せられた。

恋愛と貞操は、歴史的・階級的・物質的生活によって決定されている。生物学的解釈は付属的な条件に過ぎない。（『生活』第8巻第23期、1933年6月10日）

また、黄養愚という読者から、次のような意見が寄せられた。

克士氏の主張は、生理学に偏重しており、性欲と食欲を同列に論じている。性欲だけを満たすことは、恋愛ではなく、肉体的欲望による衝動的行為である。（『生活』第8巻第24期、1933年6月17日）

さらに、楊芷庭という読者から、次のような意見が寄せられた。

恋愛において、性欲は必須条件であるが、十分な条件ではない。克士氏は、唯物論の悪影響を受けている。（『生活』第8巻第25期、1933年6月24日）

これらの意見に対して、周建人は次のように反論した。

ここ数十年以来、物理や化学の用語を用いて心理的、精神的現象を説明することは、極めて一般的なこととなっている。唯物論の悪影響を受けているとは思わない。(『生活』第8巻第25期、1933年6月24日)

その後も、周建人はいく度となく自分の観点と立場を繰り返し強調している。その理由を「時代の変化によって、科学に対する偏見は少なくなったが、依然として宗教や道徳などの影響で受け入れられ難い状況にある」(『生活』第8巻第28期、1933年7月15日)とし、「私に対する「唯物論」に関する批判については、依然として納得できない」(『生活』第8巻第31期、1933年8月5日)、「私は「新唯物論者」ではない」(『生活』第8巻第33期、1933年8月19日)と述べている。

しかし、このような活発な論戦が続くなかで、議論そのものに対する反対の意見もあった。1933年5月27日の投書欄に、朱光という読者から「「恋愛」と「抗日救国」の機会」と題した投書が寄せられた。そこでは、編集者に対し、以下のような不満が述べられた。

韜奮先生、私は貴誌から多くの知識を得た。しかし最近、国難緊急の時期に貴誌においては抗日救国の言論は少ないにも関わらず、「恋愛」に関する議論は三分の一のスペースを占めている。(中略)このような緊急でない「恋愛」問題については少し触れる程度で十分であり、抗日救国の話題に移してほしい。(『生活』第8巻第21期、1933年5月27日)

この読者と同じような意見が寄せられたことに対して、鄒韜奮は「朱光氏と同じ意見はほかの読者からもあった。しかし、本誌の投書欄は公開の場であり、読者の関心のあるトピックなら特に制限することがない。克士が提起した問題は、民族社会意識を高める方法の一つである」(『生活』第8巻第21期、1933年5月27日)と回答し、「恋愛と貞操」問題の重要性を訴えた。

この「恋愛と貞操」論争は、1933年4月から9月までの四カ月間に渡って『生活』誌上で展開された。最後に1933年9月2日の第8巻第35期で編集者の意見が述べられた。次の三点である。まず、恋愛は性欲に基づいている。生物学を超える唯心的恋愛観は、存在する可能性がない。次に、恋愛は社会関係から独立することができない。合理的社会関係において、恋愛と貞操は一致している。最後に、現時点では貞操は片方の束縛であり、打倒すべきである。編集者である鄒韜奮のこの発言をもって一連の論争の終止符

が打たれた。

3. 若干の考察

以上見てきたように、1918年の「貞操」論争から、1925年の「新性道德」論争を経て、1933年の「恋愛と貞操」論争に至るまで、いくつかのセクシュアリティ認識をめぐる論争が繰り広げられた。1918年、1925年における二回の論争と、1933年の論争を比較し、以下のいくつかの側面から若干の考察を試みたい。

(1) 論争の「場」と参加者の変化について

まずは、論争が起きた「場」の変化である。三回の論争は、それぞれ約七年間の隔りがあった。その間、論争の場は、雑誌『新青年』から『婦女雑誌』や『現代評論』へ移転し、さらに『生活』に移った。『新青年』は新文化運動¹³における知識人言論発表の主要なメディアである。『婦女雑誌』は近代中国でもっとも影響力をもつ女性誌であるが、多くの男性知識人にも注目され、女性解放運動に関する言論を次々に発表した。しかし、これらの雑誌で繰り広げられた議論は、周作人、魯迅、胡適、周建人などのエリート知識人（学者）によるものであると言えるのに対して、1933年の「恋愛と貞操」論争は、大衆雑誌『生活』で展開された。李頻は、次のように分析している。「『生活』が創刊される前に、人々に深い影響を与えたのは『新民叢報』と『新青年』と言えよう。しかし、この二つの雑誌は「思想刊物（学術雑誌）」であり、影響を受けるのは主に青年知識人である。一方、『生活』は大衆雑誌であり、影響を及ぼす社会階級が異なる」（李 2004 196）。1933年の「恋愛と貞操」論争は、知識人（学者）に限られた議論から脱却し、より多くの一般読者が参加することができた。

(2) 論争の内容の変化について

次は、論争の内容（中心争点）の変化である。1918年の「貞操」論争においては、「貞操」をめぐる男女平等や自由恋愛、結婚制度などの概念に関する議論が中心であるイメージがあり、いわゆる「イデオロギー論」的論争だと思われる。それに対して、1925年の「新性道德」論争においては、依然「新性道德」とは何かのような概念をめぐる議論が見られるが、「性欲」や「性関係」などが論争のキーワードとなっていた。また、「一夫多妻」対「一夫一妻」というまったく対立する二つの婚姻制度に関する議論が盛んに行われた。

一方、1933年の「恋愛と貞操」論争においては、「性行為」や「生殖」が中心的な争点

となった。また、1933年の論争では、「生物学理論」を引立てた議論が目立ったことも注目すべきだろう。論争の発端となった記事は生物学者である周建人によるものであったことも大きな原因であろう。周建人は、以前から自分の主張を「生物学」理論に基づく傾向があった。「生物学を専門にし、すでに《新青年》等に「生物之起源」(6 = 4)、「生存競争與互助」(8 = 2)などを書いて進化論に関心をもっていた彼は、《婦女雑誌》でも女性の社会的地位や母性を生物学的心理学的にとらえたものが多い」(白水 1995 8)。1933年の論争のなかでも、周建人が主張する「人間—動物」という生物学理論による分析モデルそのものの妥当性に関する異議も続出した。1933年の論争は、1918年と1925年の二回より、参加者の拡大(増加)に伴う争点の多様化と話題の広汎性が顕著に見られたと言えよう。

(3) 鄒韜奮の役割について

1933年の「恋愛と貞操」論争では、重要な役割を果たしたのは投書欄という議論の場である。当然のことだが、投書欄に掲載される投書は、編集者によって選択されたものである。したがって、編集者による取舍選択という問題点について考慮しなければならない。ここでは、『生活』の編集者である鄒韜奮の役割について見てみよう。

論争のなかで、読者の投書に対する周建人の反論が数回掲載された。成純という読者から、「編集者は克士氏の意見に肩入れしている。読者に対して不公平である」(『生活』第8巻第28期、1933年7月15日)という不満の声が寄せられた。これに対して、鄒韜奮は、次のように回答した。

編集者は、克士氏がこの問題について精通していると考えてはいるが、彼を「権威」として暗示することはしていない。投書欄のスペースは限られているため、読者の便りは到着順に掲載している。(『生活』第8巻第28期、1933年7月15日)

「恋愛と貞操」の討論については、まだ多くの便りが寄せられているため、次号からさらに二回を継続して終えたい。(『生活』第8巻第33期、1933年8月19日)

このような回答文において、鄒韜奮は自分が周建人を(学者だから)特別扱いにしていることを強調している。そして、自分のもっとも重要な役割は、読者の声を投書欄へ最大限に反映させることであると弁明した。

アメリカの中国近代史研究者 Win-hsin Yeh は、鄒韜奮と当時のほかの知識人の違いを次のように述べている。

20世紀のより早い時期に、中国の知識人サークルで一種の文化革命が起き、親孝行や女性の貞操などの伝統的な倫理規範に異議申し立てが行われた。それらの過激派の知識人と比べると、鄒韜奮は一般的弾劾や規範的な非難を行うことを避けた。その代わりに、彼は日常生活における具体的かつ実的な出来事に注目した。彼は、親密な家族関係の構築における一種の言語的变化を擁護した。(Yeh 2007 112)

この「言語的变化を擁護した」とは何か。Yehは、「当時の中国において、少女が『金にもならない商品（賸銭貨）』と呼ばれ、娘の結婚が『花嫁の売り出し』と言われる地域が多く存在した」(Yeh 2007 112)にもかかわらず、鄒韜奮が「愛情の甘さ」や「幸福の追求」などの言葉を小市民の日常会話の一部に採り入れ、お互いに「私の愛する人」と呼び合った蒋介石¹⁴と宋美齡¹⁵のようなカップルを賞賛したことに注目している。すなわち、鄒韜奮の姿勢は、「言語の上品さは精神的な進歩の印」(Yeh 2007 112)と考えたなかにあるというのである。Yehのこの分析は、ある意味では鄒韜奮が直接論争に「参戦」せず、あくまでも「傍観者」として見守る姿勢を取り続けた理由の一つになるかもしれない。1933年『生活』投書欄における「恋愛と貞操」論争では、鄒韜奮が編集者として個人の意見を表明したのは最後の一回のみであった。彼がほかに発言する際には、いつも編集者という立場を表明し、周建人と読者、そして読者と読者の間における議論の調整役を務めた。

4. おわりに

以上、1933年の雑誌『生活』投書欄で繰り広げられた「恋愛と貞操」論争を、1910年代の「貞操」論争、そして1920年代の「新性道徳」論争と比較しながら、その具体的な内容と特徴を考察した。投書欄という読者、投稿者、編集者によって構築された言説空間では、当時の中国社会におけるダブル・スタンダードな性規範意識、男女における性道徳意識などの問題が提起された。これは、当時の中国における女性解放運動、国民のセクシュアリティ認識の構築に関係したものである。1930年代におけるこのようなセクシュアリティ言説をめぐるのは、それと産出する媒体、さらに論争に参加した発言者の層についても、1910年代と1920年代のそれとは大きく異なっている。論戦の「場」は、主に著名知識人（学者）らが発言する陣地である『新青年』、『婦女雑誌』、『現代評論』から大衆雑誌である『生活』へ移った。また、投書欄という広範囲の読者をもつ「誌上コミュニティ」において、より多くの一般人の発言、また高名な学者との「交鋒（意見の交戦）」が目立つようになった。このような変化は、まず近代中国における言説空間

の成熟を前提として生じた現象であるが、一般民衆におけるセクシュアリティ／ジェンダー観念の浸透の表れとも言えよう。

1910年代以降の中国において、女性解放運動をめぐる言説が大量生産されたことは事実であろう。しかし、1920年代以降の国民革命、さらに1930年代以降の日中戦争の時代へ突入するにつれ、セクシュアリティ言説という盛んに取り上げられたトピックは次第に「救国」や「抗日」に取って代わられる。本稿で考察した1933年の「恋愛と貞操」論争においても、「恋愛論争不要」のような意見はあった。また、鄒韜奮が言った「克士が提起した問題は、民族社会意識を高める方法の一つである」という主張それ自体は、1930年代の中国においていささか無力であり、あるいは理解し難い発言として感じざるを得ない。なぜ『生活』の投書欄で、中国社会の共通的世論関心が抗日へ移りつつある1933年という時期に「恋愛と貞操」論争が起きたのか。また、鄒韜奮が言う「民族社会意識を高める方法」の真の理由は何であろうか。このような問題は本稿では解決することができないが、今後の課題としたい。

注

1. 鄒韜奮：(1895年11月5日～1944年7月24日)本名は鄒恩潤、韜奮は筆名の一つである。中国福建省生まれ。近代中国の著名なジャーナリスト、生活書店創始者、救国会活動家として知られる。
2. 『新青年』：1915年9月、陳独秀が上海で『青年雑誌』として創刊、のちに『新青年』と改題された。近代中国における新文化運動の中心的な啓蒙誌として、当時の青年知識層に大きな影響を与えた。
3. 周作人：(1885年1月16日～1967年5月6日)本名槐寿。中国浙江省生まれ。近代中国の作家、文学史家である。日本留学後、北京大学教授となった。新文化運動においては、ヒューマニズムの普遍的な理想を唱えた論文「人の文学」などを発表、青年に大きな影響を与えた。
4. 胡適：(1891年12月17日～1962年2月24日)本名胡嗣糜、のちに改名して、胡適となった。中国上海生まれ。近代中国の著名な学者、教育者、政治家である。アメリカ留学後、北京大学教授となった。1938年に駐米大使となり、親米派として抗日戦争期の民国外交を担った。
5. 魯迅：(1881年9月25日～1936年10月19日)本名周樹人。中国浙江省生まれ。日本留学後、北京大学、北京女子師範大学、厦門大学、中山大学などで教鞭をとった。近代中国のもっとも著名な作家であり、評論家、翻訳家、文学史研究者でもある。
6. 藍志先：(1887年～1957年9月12日)本名藍公武。中国江蘇省生まれ。日本とドイツ留学後、参議院議員を務めた。のちに上海『時事新報』編集長、北京『国民公報』社長、『晨报』主筆、北京大学教授を歴任した。
7. 『婦女雑誌』：1915年から1931年にかけて上海の商務印書館から発行された月刊雑誌。近代中国における代表的な女性誌である。

8. 『現代評論』:1924年に北京で創刊された総合雑誌である。1927年3月から上海で発行し、1928年に廃刊された。
9. 章錫琛:(1889年4月24日~1969年6月6日)中国浙江省生まれ。『東方雑誌』、『婦女雑誌』、『新女性』など複数の雑誌の編集に携わった。1926年、開明書店の社長を務めた。
10. 周建人:(1888年11月12日~1984年7月29日)中国浙江省生まれ。近代中国の生物学者である。日本留学後、上海商務印書館編集者となり、雑誌『東方』、『婦女』、『自然科学』の編集を担当した。
11. 陳百年:(1887年9月14日~1983年1月8日)本名陳大燾。中国浙江省生まれ。1904年に日本留学、東京大学卒業後、北京大学教授となった。1921年にドイツ留学、帰国後北京大学哲学学部主任を務めた。
12. 生活書店:1932年7月上海にて、鄒韜奮が中華職業教育社から独立して創立した出版社である。1948年10月、生活書店、新知書店、読書書店は合併し、三聯書店として設立され、中国の大手出版社の一つとして今日に至る。
13. 新文化運動:1910年代後半に起こった反封建・新文化提唱の運動である。雑誌『新青年』は主要な陣地であり、初め上海が拠点であったが、のちに北京に中心が移った。
14. 蒋介石:(1887年10月31日~1975年4月5日)中国浙江省生まれ。近代中国の軍人、政治家。1928年に南京国民政府主席に就任した。
15. 宋美齡:(1901年3月14日~2003年10月23日)上海に生まれ。1927年の蒋介石との結婚以降、中国国民党内に大きな影響力を持った。

引用文献

< 史料 >

- 『現代評論』影印本(岳麓書社、1999)
『新青年』影印本(上海書店、1988)
『生活』影印本(人民出版、社1980)
『婦女雑誌』影印本(線装書局、2010)
『莽原』影印本(上海書店、1984)

< 日本語 >

- 天兒慧ほか編『現代中国事典』(岩波書店、1999)
小野和子『中国女性史—太平天国から現代まで』(平凡社、1978)
坂元ひろ子『中国民主主義の神話—人種・身体・ジェンダー』(岩波書店、2004)
清水賢一郎「革命と恋愛のユートピア—胡適の〈イプセン主義〉と工読互助団」『中国研究月報』49.1
(1995): 1-20
白水紀子「『婦女雑誌』における新性道徳論: エレン・ケイを中心に」『横浜国立大学人文紀要・第二類、語学・文学』42(1995): 1-19
張競『恋の中国文明史』(筑摩書房、1993)
陳姪媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』(勁草書房、2006)

中山義弘『近代中国における女性解放の思想と行動』（北九州中国書店、1983）

藤田正典編『現代中国人物別称総覧』（汲古書院、1986）

村田雄二郎『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』（研文出版、2005）

山田辰雄『近代中国人名辞典』（霞山会、1995）

楊韜「投書欄における読者・投稿者・編集者—生活書店出版物を対象とした歴史的考察」『中国研究月報』63.9（2009a）：13-25

——「近代中国における「国貨」をめぐる言説の一考察—雑誌『生活』（1925～1933）を通して」『現代中国研究』24（2009b）：62-75

< 中国語 >

李頻「韜奮研究随想」韜奮記念館編『鄒韜奮研究 第一輯』（学林出版社、2007）：193-197

彭小妍「五四的「新性道德」—女性情欲論述與建構民族国家」『近代中国婦女史研究』3（1995）：77-96

許敏『民国文化』（上海人民出版社、1999）

徐友春『民国人物大辞典 増訂版』（河北人民出版社、2007）

< 英語 >

Yeh, Wen-Hsin. *Shanghai Splendor: Economic Sentiments and the Making of Modern China, 1843-1949*. Berkeley: University of California Press, 2007.

付記：

本稿は、2011年3月26日東京大学で開催された日本中国学会第一回若手シンポジウムで口頭発表した内容に大幅加筆したものである。当日ご助言を下さった大橋毅彦先生（関西学院大学）、鈴木将久先生（明治大学）、高橋俊先生（高知大学）、星野幸代先生（名古屋大学）、及び会場で質問やコメントを頂いた方々に感謝したい。